

『意味の論理学』入門——フッサールとドゥルーズ

河口 丈志

「入門」と題した本稿が目指すのは、ジル・ドゥルーズの『意味の論理学』（1969年）¹の議論が位置する文脈を示し、全体の図式を明らかにすることにある。研究状況について触れておくと、ドゥルーズの著作すべてに関して言えることだが、この本が何を言わんとしているかについての最低の共通理解さえもまだ形成されていない状態である。意味という問題についての一般的な解説が不足気味であるということもこの著作の理解を困難にしているのかもしれないが²、『意味の論理学』に触れている多くの論者は、ドゥルーズが論じている「意味 sens」を言語的なものに限定して捉えてしまっているために、この著作を全体として理解することに失敗しているように思われる³。意味は言語に属するものではなく、独自の領域を形作っている。意味とはどういうものであるとドゥルーズは考えているのか、これについて基本的な点をまずは押さえておく必要があるだろう。そして、ドゥルーズの議論がなぜ提出されたものなのか、この著作の意図と議論の争点がどこにあるのかを理解しなければならない。

本論では、『意味の論理学』の主張と意図を明確にするために、それをフッサールの意味の理論と対比させる。この対比は偶然に選ばれたものではなく、この書の基本的な性格にかかわるものである。というのも、フッサールとの対決が『意味の論理学』の中心的なモチーフの一つとなっているからである⁴。両者のどこが同意点でどこが相違点なのかを明らかにすることで、この書の地位をはっきりさせることができるだろう。フッサールを参照しつつも、ドゥルーズはフッサールとは異なる立場で意味に関する理論を提示していることを明らかにしたい。とはいえ、個々の論点はそれだけで独立した論考を必要とするものであるため、本論ではフッサールに対するドゥルーズの意図を概観するにとどまらざるをえなかった。

『意味の論理学』が位置する文脈

意味について今日提出されている議論はあまりに多様なので、ドゥルーズのいう「意味」がどういう文脈のもとで議論されているのかについて、まず簡単に述べておく必要があるだろう。これには長い哲学的議論の歴史があるが⁵、ドゥルーズの意味の理論にとってもとりわけ重要である論点が19世紀に提出されている。それは、意味が理念的なものとして見いだされたことである⁶。意味は普遍であり、理念である。たとえば、「木が燃える」という文は、木の実在にかかわらず永遠に妥当するものである。つまり、木が燃え尽きてしまっても、その文の意味は変化しない。もし意味が物の実在に左右されるのであれば、人はそこにあるものについてしか話すことができないだろうし、記号あるいは言語といったものは成立しないだろう。それゆえ意味は、単純な指示を除くあらゆる伝達・言語の基礎となっている。意味に関するこの論点は、言語の問題としてもよくとりあげられるものである。

ところがまた、意味は知覚を成立させるものでもある。何かを見て、それを知覚するということ、それは「何かを何かとして」直観的に把握することである。「何かとして」というのは「特定の意味として」ということだ。しかしかの意味として何かを把握すること、それは物理的な認識でもないし、実在を問題にする必要もないことである。たとえば、明確にパンを知覚しているとき、私たちはそれを「練られた小麦粉が酵母菌によって発酵されたもの」として捉えているわけではない。つまり、ある事物の物質的な状態を捉えているわけではないし、推論しているわけでもない。そうではなく、事物の状態から「パン」という理念的な意味を直観的に受け取って知覚しているのである。

このように、大きく言えば、ドゥルーズが論じている「意味」は、言語と知覚の両方の側で問題になっている。つまり、彼が問題にするのは言語的なものだけでなく、より一般的なものである。それは特殊な理論などではなく、日常私たちが直観的に把握しているありふれたものについての理論である。そこで問題になっているのは、「それってどういう意味」、「それは～という意味だよ」といったような会話が交わされるときに問われている「意味」である。しかし、意味を一般的に考えようとすると、存在者に対して存在を問うような困難につきあたるだろう。普段直観的に把握している意味に対して、それをさらに全体

的かつ一般的に直観することを要求するわけだ。だが、そのような方法的な直観こそ哲学という営為なのであり、『意味の論理学』の偉大さ（と同時にその難解さの原因）は全体的かつ一般的な「意味」について論じていることにある。

ドゥルーズ以前に、意味をこのように一般的に問題にしていたのはフッサールであった⁷。『論理学研究』は言語に関する意味についての、『イデー』は知覚に関する意味についての研究であったと言えるだろう。現象学の意義は、意味という内在的な次元の発見にあり、それはたとえば、言葉と物という二項対立をもとに認識について考えることを乗り越えさせる。ドゥルーズの議論は、フッサールが提示した問題設定を強く意識している。それは要するに、ある種の存在論としての意味の理論なのである。とはいえ、現象学の根幹をなす、意味は主観と相関的であるというテーゼにドゥルーズは同意しない。この論点に立ち入る前に、まずは意味についてのドゥルーズの基本となる考えから見ていくことにしよう。

効果としての意味

『意味の論理学』の第2セリーで問題になっているのは、出来事としての意味である⁸。ドゥルーズはこれを、「事物の表面の非物体的な効果 *les effets incorporels de la surface de choses*」あるいは「事物の状態の属性 *l'attribut de l'état de choses*」(34)と定義している。これらは同じことを言わんとしているのだが、どういうことだろうか。また、「効果」とは何のことだろうか。たとえば、ナイフで肉を切り分けるときのことを考えてみよう。肉は「事物 *chose*」であり、切り分けられたということは「事物の状態 *l'état de choses*」である。ナイフは能動的であり、肉は受動的である。これはすべて事物に属することがらである。これに対し、切り分けられていること、これは事物には属さない。これが「事物の状態の属性」である。これは一方の事物の能動と他方の事物の受動の「効果・結果 *effet*」である。

この区別は意味を理解する上で決定的に重要なものだ。たとえば、切り分けられていることを切り分けられてしまっていることを区別しなければならない。肉が切り分けられてしまうと、残っているのは二つに分けられた肉である。そこにあるのは二つの肉という「事物」であり、切り分けられているというそ

の肉の「状態」である。これらに対し、切り分けられていることは事物の表面で起こっている出来事であり、事物の状態や性質ではない。この「効果」あるいは「出来事」は物的でも物理的なものではなく、非物的あるいは超物理的なものであり、実在するものではなく、理念的なものである。

なぜこのような「効果」を問題にするのだろうか。それは、意味をこの考え方をもとにして理解するためである。たとえば知覚について考えてみよう。知覚することは何かを何かとして把握することだと上で述べた。この「～として」把握されるもの、それは事物そのものでも事物の状態でもそれらの感覚でもなく、それらの効果なのである。「パン」という意味は、その物的な組成に由来はするかもしれないが、それに還元できるものではない。表面の焼けた色、質感、匂いといった物体が与えてくるさまざまな感覚的な要素が、「パン」という意味としていわば結実するのである。効果としての意味という考えは、意味は生産されるものであるということと言わんとしている。

ところで、切り分けられていることは動詞的な事態である。何かがあるとして現れるということも、やはり動詞的な事態である。たとえば、ある木を緑として知覚することは、ある木の緑を形容詞的に把握することではなく、木が緑になるという動詞的な事態なのである。つまり、木の個々の葉っぱという事物やその状態が、全体として統一的に「緑になる *verdoie*」という効果をもつことである⁹。知覚することは、事物や事物の状態の効果という動詞的な出来事、つまり意味、が生じるということにほかならない¹⁰。

現出、生産物としての意味

であるならば、「効果」とは要するに現象学で言う現出(*apparence*)のことであると言ってもよいだろう。何かがあるとして現出することということ、それは物体でもその能動や受動でもなく、「事物の表面の非物的な効果」なのであり、またそれは事物でも事物の状態でもなく、「事物の状態の属性」なのである。なお、意味が言語と知覚の両方の側で問題になると言っても、それは意味が言語的存在者であると同時に知覚的存在者でもあるということと言わんとしているのではない。そうではなく、意味は独立した存在者であり、独自の本性をもつということである。

現出が効果として考えられるという指摘はドゥルーズ自身によってなされている。「フッサールが現出と呼ぶもの、それは表面の効果以外のものであろうか」(33)。これは、『意味の論理学』が位置する文脈を明らかにするものであるがゆえに、この哲学書全体にとって重要な指摘である。意味が現出であるということ、それは私たちが知覚し認識するものすべてが意味である、ということであり、ということは、それについての理論は、すでに述べたように、ある種の存在論となるわけである。つまり、ここで賭けられていることは、生というものを意味という観点から考えようとするることなのである¹¹。常識的な考えからすれば、意味は言語によって生まれるものであろう。しかしここでの考え方では逆に、カント的な言い方をすれば、意味は言語の可能性の条件であり、さらには、存在の条件なのである。このような発想を理解するためには哲学的直観とでも呼ばれるものが必要である。

私たちが知覚するものすべてが意味であるということはどういうことだろうか。たとえば意味を普遍であるとする説明の仕方も可能かもしれない¹²。何かを見て、それが何かであると認識するとき、私たちはそれを「普遍」において捉えている。馬という「普遍」において個々の馬を捕らえることによって、逆に個々の馬の差異も見えてくるわけである。そして今度は、個々の馬もまたそれぞれが「普遍」であり、年齢や体重の変化にかかわらず、同じ馬として認識できるわけである。もちろんそこには一つの意味ではなく、複数の意味がありうるのだが。意味が把握されない世界には、知覚どころか感覚があるとさえも言えず、情動しかないはずだ。

言語や命題そのものが意味ではないというのは、たとえばこういうことである。一つの文章はそれだけで客観的な意味をもつわけではない。その文章を読み、文法を解し、文脈を知ることではじめて意味が見えてくるのである。それは何かしら浮かび上がってくるようなものであり、浮かび上がってきたものはその文章とは異なる存在者であるはずである。と、ここまでくると意味とは主観的なものであると言いたくなってくるだろう。事実フッサールはそう考えた。もちろんより哲学的に、意味は「主観と相関的な領野である」と言うのだが。それは単純に客観と対立する主観なのではない。彼のいう「超越論的主観性」とはそこで客観が生み出される場所のものである。そこで世界が与えられる

と言ってもよいだろう。

これに対してドゥルーズは意味を効果として、あるいは生産されるものであると考える。一見控えめなこの定義は、実は意味を主観に関連づける発想に対して持ち出されている。先ほど、意味が「浮かびあがってくる」と書いたが、これが主観において与えられるということを強調するのがフッサールであり、浮かびあがってくるということそのことを強調するのがドゥルーズであるわけだ。

「ノエマ」としての意味

さて、フッサールは『論理学研究』において命題における「表現」あるいは意味(Bedeutung)について論じた。『意味の論理学』第3セリー「命題」の論述の多くは『論理学研究』に依っている。『イデー』では「知覚のノエマ」について研究されているが、これは広義の、つまり言語的なものに限らない意味(Sinn)についての研究である¹³。ドゥルーズが、表現は命題における指示(désignation)や意義(signification)と混同されないし¹⁴、知覚としての意味は事物や事物の状態と混同されないと言うとき、フッサールのこれらの研究が前提とされている。そして、第4セリーにおいて命題と事物の二元性について語る時、彼がどれほどルイス・キャロルについて言及することをやめないとしても、下敷きにされているのはやはりこの二著作である。というのも、意味を命題と事物の両方の側で、それらと区別されるものであることを説きながら、初めて明確に扱った者こそ、フッサールなのだから¹⁵。

第3セリーにおいて、ドゥルーズは『イデー』におけるノエマについてまとめている。

フッサールが「知覚のノエマ」や「知覚の意味」について検討するとき、フッサールはそれを、物理的対象・心理的体験・心的表象・論理的概念から区別している。フッサールはそれを、物理的実在も心的実在もなく能動も受動もしない非情で非物体的なものとして、純粋な結果、純粋な「現出」として提示している。実在する木(指示されたもの)は、燃えることがありうるし、作用の主体でも作用の対象でもありうるし、混合したものになりうるが、木

のノエマにはそんなことはない。……フッサールが、ノエマはある提示 (présentation) において現出するままに知覚されるもの、「知覚されるままのもの」ないし現出であると言うとき、感覺的所与や質が問題になっていると解してはならず、反対に、知覚作用の志向的相關項としての客観的で理念的な統一性が問題になっていると解さなければならない。何らかのノエマは知覚において与えられるわけではなく (想起においても像においても与えられない)、まったく別の規定をもつのである。それは、ノエマはそれを表現する命題、知覚命題、想像的命題、想起や表象の命題の外には実在しないということにある。感覺の色や質としての緑から、われわれは、ノエマの色あるいは属性としての「緑すること verdoyer」を区別する。(32f. 強調はドゥルーズ)

ドゥルーズのこのノエマ解釈はフッサールにかなり忠実なものだ。たとえばノエマが「知覚作用の志向的相關項としての客観的で理念的な統一性」であるというのは、現象学の用語に則ったおおむね正当な説明である。村田純一の解釈によればノエマとは、「知覚の対象は常に『同一のもの／さまざまな現れ方』という差異と連関の中で体験される。そしてこの構造を可能にしている」¹⁶ものである。これはドゥルーズのノエマ理解と異なるものではないだろう。たとえば、木が見えるということ、それは木が木として統一的に見えるということであり、「木が木になること (木する)」ことである。あらかじめ統一されて知覚されているからこそ、さまざまな現れ方 (木を近くから見るときと、遠くから見るときなど) を通じて同じものとして、あるいは、同じものとしつつ多様なあり方において認識できるのである。

また、「ノエマは知覚において (dans) 与えられるわけではない」というのは重要な指摘である。フッサールにおいては、知覚することそのことが意味を付与することであり、知覚のなかに意味が組みこまれているというわけではないからだ。ここで注意しておきたいのは、意味が知覚や言語に従属していると考えるのは誤りであるということだ。意味は事物や命題から完全に区別されうる独自の領野なのである。この認識を徹底させていることが『意味の論理学』を難解にしている一因であるかもしれない。「言語における意味」や「知覚における意味」などと書けば分かりやすいが、誤解を生みやすいだろう。その代わりに

ドゥルーズはのっけから「事物の状態の属性」といった完全な定義を持ち出してくるのである。意味という問題そのものが、分かりやすく常識的な言い回しを許さないわけだ。

壊れやすいものとしての意味

効果としての意味という考えを導入した後、第6～12セリーにおいて、「逆説的な審級 instance paradoxale」について論じられている。ここでは、効果としての意味の本性が同一的ではないということが強調される。周知のように、フッサールは意味を同一的なものとして考えた。コミュニケーションが可能なのは、意味に同一性があるからというわけである。だがおそらくドゥルーズにとって、意味を同一なものとして考えることは、意味と指示を取り違えていることである¹⁷。ある対象がさまざまな射影において同一のものとして意識されていることは、その意味の同一性ではなく、指示の同一性によるものであろう。もしそうでなければ、同じ対象を意識しながらも、その意味が変容していくということがどのように起こりうるというのだろうか。もしそうでなければ、私たちは新しいものを知覚することはできないだろう。さらに言うなら、意味の同一性が知覚やコミュニケーションを一般的に可能にしているのではなく、同じ意味が個別的に可能にしているのであり、また異なる意味が個別的に可能にしないのである。

ドゥルーズが意味の壊れやすさ、「もろさ fragilité」を主張するのは、こうした問題意識があつてのことに思われる(115)。つまり、ドゥルーズにとって意味は同一的かつ本質的なアイデアではない。それゆえ、意味は「シミュラクル simulacre」であると主張されるのである。それは要するに、非プラトンのな理念^{イデア}である。コミュニケーションにおいてつねに誤解が生じうるのは、私たちが意味そのものを直接やりとりすることはできないからであり、効果としての意味の壊れやすさによるのである。円滑なコミュニケーションが可能な場合は、文脈の類似が同じ意味の再生産を助けているわけである。

さらにドゥルーズは現象学で言われる「還元」も支持しない。還元ということで前提とされているのは、意味という領野が発見されるべきものであるという考えである。これに対し、第11セリーにおいて「意味は発見されるべきもの

ではないし、復元されるものでも再使用されるべきものでもない」(90)と書かれている¹⁸。ここでは現象学の還元理論が退けられていると見るべきだろう。

超越論的主観性が未分化な深淵か

現象学の還元理論においては、そこで意味付与が行われる「超越論的主観性」が前提とされている。フッサールはこれを「意識」とも呼ぶ。かといってそれは経験的なものではない。というのも、もし意味がなければ世界もないので、超越論的主観性はアプリアリなものだからである。それは世界の「可能性の条件」であると言ってもよいだろう。このように、体験あるいは世界の成立を考えるさいに、超越論的なものを持ち出してくるのはカント以来の哲学のオーソドクシーをなしている。ドゥルーズ哲学は全体としてこれを覆そうとしているのだが、『意味の論理学』では、カント的なフッサールとは異なる考え方を提示しようとしている。

第15セリーにおいて、ドゥルーズは意識を意味の領野として考えることを明確に否定している。フッサールにおいて、中期以降においても主観性はそれ自身構成されるものではあるものの、依然として意味が贈与される場として想定されている。主観が構成されるものであること、これはドゥルーズにとっても自明である¹⁹。だがフッサールにとって主観性の構成は意味の発生に先行するか、少なくとも同時である。どちらにせよ、意味が贈与される場を意識として考えている。だが、これでは単純な条件づけにとどまってしまう、真の発生を考えることはできないとドゥルーズは言う(128)。意味によって認識が可能になるのであれば、意識は意味以降に生まれるはずである。意識が根源的なものであるとすることは、この順序を逆転してしまうことになるだろう。なぜ現象学者はそのように考えざるをえないのだろうか。それは彼らが未分化な深淵を恐れるからである。すでに个体化され条件づけるものである主観性がなければ、未分化な深淵(fond)が待ち受けているというわけだ(129)。

これに対し、ドゥルーズが導入する「超越論的領野」は、意味の可能性の条件を与える場ではなく、意味がそこにおいて生産される場である(Cf. 151)。これは底なしの深淵ではなく、構造を具えている。ドゥルーズは「構造」を特殊な意味で用いており、それはカント的なものではなく、むしろライプニッツ的なもので

ある。第6セリーあたりから展開されている議論は、このドゥルーズ独自の意味の発生の理論のために持ち出されてきたものだ。この理論に本論では詳細に立ち入ることはできないが、これは真の発生を考えるためのものであり、それがこの時期のドゥルーズ哲学の最大の企図をなしている²⁰。意味は深淵から発生するのではなく、超越論的領野において発生する（そして逆説的なことに、これは「深層 *profondeur*」に対する「表面 *surface*」であると言われる）。そして、意味から個体化が、そして主体性が発生するのである。超越論的領野というのはドゥルーズにとってアプリオリが発生する場ではなく、そこで発生が行われる場なのであり、条件もまた生成されるものなのである（ゲームの規則は遊びながら作られ、そのつど変化する）。

生産するものとしての意味

さて、ドゥルーズの考えにおいては、意味は特異性において個体化を産出し、個体が主観性となっていく。しかし、意味が一方で効果であるのに、他方で個体化を産出するとはどういうことだろうか。それは、一方で意味は物體的な事物の非物體的な効果(*effet*)であるが、他方でほかの非物體的なもの（ここでは個体化）に対する準原因(*quasi-cause*)であるからである。第2セリーでドゥルーズはストア派による因果関係理論を参照しつつ、「非物體的な結果 *effet* は、別の非物體的な結果に対しては決して原因ではなく、単に準原因である」(15)と述べている²¹。この理論を意味に適用することによって、生産されたものであるにもかかわらず生産するものであるという意味の側面について論じることができるようになる²²。第17セリーの最後では、意味のこの側面について整理されて述べられている。

表面が保たれる限り、意味はそこで効果として広がるだけでなく、表面に結びつけられている準原因という性質を帯びる。つまり、意味が今度は個体化と、物体と物体の限られた混交とを決定する過程で生じるすべてを生産し、意義と、命題と命題に割り振られた関係を決定する過程で生じるすべて——すなわち第三の配列(*ordonnance*)全体、あるいは静的発生の対象を生産する(151 強調は引用者)。

ここで「静的発生 *genèse statique*」と言われているのは、意味が個体化や言語の秩序（第三の配列）を生産することである。これに対して、意味がそこで発生する超越論的領野（第二の組織化）が形成されることは「動的発生」と呼ばれる（意味以前の情動のみの深淵が「第一の秩序」）。フッサールにおいて、主観性の構成とノエマの構成は分離されえない課題であったが²³、ドゥルーズにおいては意味が明確に主観性に先行するのである。

意味と無意識

第26セリーからは、幼児の発達について研究したメラニー・クラインを主に参照しつつ、音が独立して言葉になる過程である動的発生(*genèse dynamique*)について論じられる。それは幼児が「ばぶばぶ」から「ママ」へと移行する過程である。「音が独立するというで語られていることは、音が雑音や叫びといった物体に隣接する特殊な質ではなくなって、いまや質を指示し物体を表出し、主語と述語を意義するようになるということである」(217)。赤ん坊は初めまったく言葉をしゃべれないが、だんだんと言葉を覚えていく。その過程は普通には言語の習得だと言われるだろうが、それは同時に（またはそれ以前に）意味の世界への参入でもあるはずだ。精確には、意味を生産する「超越論的領野」（＝表面）それ自体の獲得、その過程が動的発生と呼ばれるのである。

ここでは、表面の獲得の経緯を見ることによって、意味を意識と同一視できないことが歴史的な側面から論じられることになる。「意味と無意味の拮抗関係 (*jeu*)、そして超物理的(*métaphysique*)面と物理的面上における表面の効果は、最も深く埋もれた深層の能動と受動と同じく、意識に属してはいない」(122)。意味は意識に属するものではない。これは『意味の論理学』全体を導いているテーゼである。さらに、「深く埋もれた深層の能動と受動」で起こっていること、それは意味を生産する表面の獲得であり、これもまた意識の仕事ではない。それゆえ、注目すべきことは、ここでドゥルーズが精神分析の理論に多くを負っているということよりも、ドゥルーズが無意識においた大きな役割である。無意識は超越論的領野における意味の生産ばかりでなく、超越論的領野それ自体の獲得にもかかわっているのである。後者の側面は文脈を変えつつも、『アンチ・オイディプス』では、「生産の生産」として変奏されることになる²⁴。

結論

ここまでの検討で、ドゥルーズがフッサールに何を負っており、そして彼の理論のどこを批判しているのかが概観できただろう。整理しておく、すでにフッサールは意味の理念性を主張し、それが発生するものであること、ドゥルーズ風に言えば「効果」であることを論じていた。ドゥルーズはこの点には賛同する。しかし、フッサールは超越論的主観性を前提としたために、意味の発生の問題を主観性の構成の問題へと置き換え、そこでとどまってしまった。これに対しドゥルーズは、効果としての意味という考えを徹底させることによって、意味そのものの発生という問題に取り組む。この書の論旨が、意味の理論をフッサールに抗して書き換えようとする意図によって貫かれていることが見えてきたらうか。

また、議論の大きな構成も見えてきたように思われる²⁵。重要であるのはおもに三つの発生を区別することである。それは、「静的発生」と呼ばれる意味からの「第三の配列」の発生と、超越論的領野における意味の発生（＝配分）、そして「動的発生」と呼ばれる意味の表面（「第二の秩序」）の獲得、である。単に意味の発生についてのみ論じたのではなく、意味からいかにして日常的な意識（個性性や人称性）が生じるのかをも論じ、意味がそこで発生する場を「表面」と捉えたうえでその表面の獲得についても論じているのである。

いずれにせよ、この書にアプローチするためには何段階もの「発想の転換」が必要であるのは間違いない。まずは意味を言語においてのみ捉えるのをやめて「意味の存在論」とでも言うべき発想を手に入れること、意識から意味を考える発想を逆転させること、「超越論的」という言葉のある意味で非カント的に解釈すること、さらには「超越論的領野」そのものが生み出されるものであることを理解すること……。ドゥルーズの議論は普通の常識を覆すものであることは間違いないが、哲学的な常識もまた覆すものである。本論では、前者の側面をフッサールから受け継いでいることを、後者の側面においてフッサールと異なっていることを駆け足で示そうとした。

註

¹ Deleuze, *Logique du sens*, Minuit, 1969. (小泉義之訳『意味の論理学』、河出書房新社、2007)

- この著作のページ数の指示は本文中に記入する。なお、引用はすべて私訳による。
- 2 意味についての入門書として最良であるのは廣松渉のいくつかの著作だろう（『もの・こと・ことば』や『哲学入門一歩手前』など）。彼の言う「こと」とはまさに「意味」である。尤も、廣松は「こと」を言語的なものと見なす傾向があるが、それはミスリーディングであろう。
 - 3 たとえば、大山載吉「表層・深層・抽象機械における言語——『意味の論理学』から『千のプラトーン』へ」（小泉義之・檜垣立哉・鈴木泉編、『ドゥルーズ／ガタリの現在』、平凡社、2008）や Jean-Jacques Lecercle, *Deleuze and language*, Palgrave Macmillan, 2002 など。
 - 4 一般に「意味論」と呼ばれるものとドゥルーズの意味の理論とは別物であろう。
 - 5 意味の理論というテーマのもとで哲学史を読み直すことは魅力的な作業である。たとえば、中世における意味の理論については、山内志朗『普遍論争』（平凡社、2008）を参照せよ。
 - 6 新カント学派の「理念的な次元」についての簡単な概観は、熊野純彦『西洋哲学史』下巻（岩波書店、2006）の第12章で得ることができる。
 - 7 意味の理念性の発見を西南ドイツ学派に帰すなら、知覚としての意味の発見はボルツァーノ、フッサールというオーストリア学派の系譜に帰することができるだろう。この系譜については J. Benoit, *Entre acte et sens : recherches sur la théorie phénoménologique de la signification*, Vrin, 2002 などを参照せよ。
 - 8 冒頭の数セリーの、より詳細な読解に関しては、三宅祥雄「『意味の論理学』注解」（大阪外国語大学フランス語学科研究室『Etudes françaises』、30-31号、1997、1998）が有益である。
 - 9 これはストア派によって論じられたことだが（Cf. エミール・ブレイエ『初期ストア哲学における非物的なものの理論』江川隆男訳、月曜社、2006、pp. 37-42）、フッサールもまた意味のこの動詞性を指摘した。しかし、フッサールは意味を述語と解することによってその動詞性を取り逃がしている、とドゥルーズは批判する（第14セリー）。つまり、（とくに西洋の言語において顕著なように）述語はすでに主語の支配を受けてしまっているものであり、これでは、その現れが固定化されてしまっているもの（現在化・表象化されてしまっているもの）をもとに意味について考えることになるというわけだ。これに対してドゥルーズは「不定詞」として出来事を理解する。
 - 10 ここでの少し奇妙な言い回しの根拠については、上野修「意味と出来事と永遠と」（『ドゥルーズ／ガタリの現在』、前掲書）を参照されたい。
 - 11 中世の普遍論争とドゥルーズの意味の理論の関係については、とりあえず Alami, « Deleuze et Avicenne », *Chières*, N° 31, été 1997. を参照せよ。
 - 12 現象学における生というテーマ、その存在論的な射程についてエマニュエル・レヴィナスほど明確に語ったものはいない（E. Levinas, *Théorie de l'intuition dans la phénoménologie de Husserl*, Vrin, 1930）。これは未だに、フッサールの理論が全体として何を意味しているのかを理解するための必須文献となっている。
 - 13 Husserl, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, 1913, § 135, S. 278. （渡辺二郎訳『イデーニ I-II』、みすず書房、1984、p. 271）
 - 14 「指示 désignation」はフレーゲの言う Bedeutung に、「意義 signification」は Sinn に対応すると考えてよいだろう。意義は「意味 sens」と混同しやすいが、「論証の論理的な価値」のこと、要するに論理的な意味のことである。たとえて言えば、スピノザ『エチカ』の個々の命題の論証を理解するのは意義を理解することだが、この本が全体と

して (en global) 何を言わんとしているのかを把握するのは、意味に関することがらであろう。ドゥルーズはドジゾン名義の作品とキャロル名義の作品に二つの区別をあてはめている。

- 15 第26セリーでドゥルーズはこの二元性を「出来事がノエマ的屬性として参照させる諸物体と、出来事が表現可能なものとして参照させる諸命題」(213)と言い直している。
- 16 村田純一「現象学の成立 — プレンターノとフッサール」、新田義弘編『現象学運動』(岩波講座 現代思想6)、岩波書店、1993、p.36。
- 17 同一性をもとになされている思考についての批判は、『差異と反復』でもその最大のモチーフをなしている。なお、よく『差異と反復』が哲学史に対する批判から成り立っているネガの本であり、『意味の論理学』がドゥルーズの積極的な主張を打ち出したボジの書であるという見解が述べられることがあるが、これは誤りである。『差異と反復』は反復の積極性について論じられたまさに肯定の書であり、「内在」という彼の思考の論理、そして「理念」という理論を描いたものだ。これに対し、『意味の論理学』はそれらを意味という問題において応用したものであると言える。
- 18 なお、このこと同じ段落では、フロイトの言う無意識が「機械装置 *machinerie*」と呼ばれ、それが効果としての意味という考えにおいて成り立っていることが指摘されている。
- 19 修士論文をもとにした著作である『経験論と主観性』(*Deleuze, Empirisme et subjectivité : essai sur la nature humaine selon Hume*, PUF, 1953.) において、ドゥルーズはすでに、効果としての主観性/心(*esprit*)という観点のもとでヒュームを論じている。
- 20 シモンドンの影響が濃いドゥルーズの個体化の理論については現在かなり研究が進みつつある。この個体化の理論は、アリストテレス的な形相-質料モデルの発想を転換させるものであるとされている。しかしそれと対をなすはずの特異性の理論についてはあまり研究が進んでいるようには見えない。こちらはカント的な超越論的条件づけという発想を転換させるものであるはずだ。ドゥルーズのカント批判については、V. Bergen, *L'ontologie de Gilles Deleuze*, L'Harmattan, 2001, pp. 40-56 でまとめられている。
- 21 第2セリーで触れられているものの、この理論が効果を発揮するのは第14セリー以降である。このように、ドゥルーズの論述は「ジグザク」になっており、その基本的な意図をまず理解しておかないと読解しにくい。
- 22 なお、生産されたものが生産するものにもなるというこの論理こそ、ドゥルーズの言う「内在 *immanence*」というシステムを特徴づけるものであり、そのような体系をもつものが「機械 *machine*」と呼ばれるのである。
- 23 Cf. 木田元ほか編『現象学事典』弘文堂、1994、p.217。
- 24 Deleuze & Guattari, *L'Anti-Édipe*, Minuit, 1972/73, p.10 なお、もちろん、『意味の論理学』における「第一の秩序」は、『アンチ・オイディプス』における「生産の生産」とはアナログカルにしか対応していないだろう。しかし、生産を三つの段階に分ける思考方法は、両方の著作において共通している。
- 25 全体の構成を捉える際に、鈴木泉「ドゥルーズ『意味の論理学』を読む：その内的組み合せの解明」(神戸大学文学部『紀要』、Vol.27、2000)を参照した。

(かわぐち たけし/トゥールーズ第二大学)